

熊野の
本林から

怪野の熊

「古道の怪(その2)」

和歌山大学
システム工学科
環境システム学
中島敦司教授



国立文書館がインターネット公開した『天保国絵図、紀伊国』(パブリックドメイン)。江戸幕府の命で、慶長、正保、元禄、天保の4回、全国規模で国ごとの絵図が作成され、天保国絵図は3年間の製作期間を経て、天保9(1838年)に完成した。明治維新後も実務に活用されたという。

前回、古道の怪(その1)にて、筆者らと和歌山大学の研究者が紀伊半島の古道、街道のデジタルマップづくりに挑戦していることを紹介した。すでに、熊野古道の紀伊路、中辺路、大辺路、小辺路、伊勢路、本宮道、川丈道、大峰奥駆道、東熊野街道、高野七口、高野街道(東、西、中、下)、紀州街道、和歌山街道、大和街道、粉河街道、父鬼街道、これらのルート

をデジタルマップ化した。まだ一部で位置の精度が粗い上、未記載の古道、街道も残っている。古座街道、西熊野街道、龍神街道、有田街道、さまざまな脇道にまで手が及んでいない。



絵図には、現在の古道の比定ルートとは違うルートが記載されている他、海の航路も示されている(写真右下)。細かく探すと、例えば、橋杭岩が見つかったりして、なかなか楽しい。

そんな中、先日、江戸時代、天保年間の紀伊国地図を手に入れる機会を得た。国立文書館が古地図をインターネットに公開していたのである。これには、当時の村の名前、村と村をつなぐ道が書き入れられていた。もちろん全ての道が網羅されているわけではないが、太い道と細い道に分けて記載され、江戸時代のメインルートの推定には役立つだろう。この情報を得たことをフェイスブックで紹介したところ、県内外の歴史研究者、愛好家から深い内容のリアクションが多くあった。一般に知られるルートと異なるのか、このルートが江戸時代に使われていたのには知らなかった、などである。中には、不明だったルートの推定に役立ちそうだな、などの驚きの

声もあり、いつの時代も資料化しておくことの大切さを実感した。

話を戻すと、時代とともに人が使わなくなったルートもあったわけだが、こういう場所では妖怪は安心して生活道に使ったりしたことだろう。寂れた廃道、妖怪道に人が立ち入ると、妖怪はビックリして、出会い頭の事故のようなことが起こる。妖怪の自己防衛、正当防衛のようなもので、これが古道の怪の正体でなかったのかと筆者は考える。もちろん、使われなくなったルートは荒れていて、人が転んだり、時には転落などの事故に遭うこともありえるのだが、それを妖怪のせいにしてたら妖怪も気の毒だ。最近では、古道歩きもエスカレーターし、整備されていない範囲を競って歩く人も少なくないようだ。くれぐれも、妖怪と出くわすことのないように注意していただきたい。

中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

